

介護とわたし

－ 体験・知識・思いの共有が作りだす未来へ

松崎 実穂



はじめに

わたしはこれまで二度の介護を体験し、現在はその経験を活かしながら、介護知識の普及や仕事と介護の両立支援プログラムの作成や、研究者として家族介護の研究も行っている。本レポートは、介護という「わたしの体験」を語れなかったわたしが、さまざまな学びと出会いを通じ、自らの体験を社会で共有し活かしてゆく道を歩み始めるまでの過程を記したものである。

本文では、一章において、わたしの介護体験を振り返り、二章ではその体験において感じた家族介護の問題点について述べる。三章では、まず、介護という体験がわたしの人生選択にどう影響してきたか、その道筋をたどる。葛藤を抱えながら行っていた介護の研究を一度あきらめた経験、そして、キャリアカウンセリングとの出会いにより、過去の体験についてとらえなおすきっかけを得るまでを述べる。四章では、仕事として“介護”に再び向き合うことになり、そこでの介護経験者たちとの出会いについて、また、介護の体験を共有することの意味について述べる。さらに、再び研究者としても“介護”に取り組む機会を得たことから、あらためて今、自らの経験を踏まえて研究者としての視点から見えること、取り組みたいことについて述べ、最後に、現在の活動と今後の展望について触れたいと思う。

第一章 わたしの介護体験

第一節 最初の介護体験 — 祖父の介護

わたしは19歳から25歳まで、祖母とともに認知症の祖父を介護した。進学先の大学に近い東京の祖父母の家へ移り住んだ1994年に始まり、2000年の3月に祖父が亡くなるまでの約6年間である。

当時80代の祖父は、食事をいつとったか覚えていない、通院先で処方された薬を用量以上に飲んでしまう、一緒に暮らし始めた私が学生なのか会社員なのか覚えられないという状態であった。徐々に祖父には重い見当識障害が現れ始め、日常生活に支障をきたすようになった。

祖母が主に介護を行う中、わたしの役目は祖父の食事の配膳と片付け、散歩に出かけた祖父が帰ってこない際の居場所の確認程度であったが、祖父の症状の進展に伴い、さまざまな内容が加わっていった。祖父はテレビの音量を最大にしたまま下げられなくなることがしばしばあったが、そんな時は深夜や未明でも飛び起きて祖父の寝室へ走るであるとか、トイレ

☆続きは『2012 年度「日本女性学習財団賞」受賞レポート集 学びがひらく vol.2』で！

http://www.jawe2011.jp/publish/gaku/201303_report.html